

儒教教育の日本的展開

荒川紘

秀吉の轍は踏まない！関ヶ原の戦いに勝利し、江戸に開幕した徳川家康は大阪冬の陣と夏の陣で豊臣氏を滅ぼすと、全国に「一国一城令」を布告、大名の居城をのぞく城はすべて破却させた。家臣団を一つの城下に集め、それによって兵農分離を徹底させ、その上で、大名には参勤交代を義務づけた。大名と藩士、將軍と大名の主従関係を揺るぎないものにして、下克上を自分で最後にしようとしたのである。京都の朝廷の動向にも目を光らせる。実権は失われていたが、政治的な力を発現させる可能性がある天皇や公家をきびしく統制した。天皇の任務を「芸能」と「学問」に限定し、他の大名に利用されるのを警戒して京都内での行幸さえ禁じた。公家でも京都の外に出るときには、京都所司代に願書を提出せねばならなかった。

この徳川幕府も「尊王」をスローガンにかかげて立ち上がった草莽の志士が先導する西国諸藩に倒される。家康の懸念は杞憂ではなかった。しかし、二五〇年は短い時間とはいえないだろう。兵農分離による支配体制の確立と朝廷の隔離策が徳川幕府に長期政権をもたらした決定的な条件であったのは疑いない。

このような機構と法による統制の強化に加えて、長期政権をささえた要因としては、家康が侍講として遇した林羅山の哲学である新儒教Ⅱ朱子学のはたした役割もあげねばならない。もともと儒教がそうであったが、君臣関係を絶対視する

名分論を説く朱子学は日本の幕藩体制の秩序形成にもふさわしい思想とみられていた。だからであろう、林羅山が幕府から提供された土地と基金をもとに開いた朱子学の私塾は代々子孫にうけつがれ、幕府の援助も受けながら、やがて幕府直轄の学校・昌平坂学問所に改編される。儒教は武士から農民・町民社会にも浸透するとともに、朱子学は官学的な地位をしめるようになる。

しかし、幕府は各藩にたいしてとくに朱子学の教育を強制したのではない。一七世紀も後半になると、朱子学に批判的な古学派が勢力をふるうようになり、そのため、松平定信は寛政異学の禁を公布するが、そのときでも、朱子学に限定したのは幕府直属の教育機関だけである。幕府の教育政策の基本は不干渉主義にあった。私塾の教育に介入することはなく、藩の方が幕府の顔色をうかがうことはあっても、幕府は藩校の設立や運営も藩の意向に委ねていた。だから、藩校の規模や教育課程は一様でなく、幕末まで藩校が設立されなかった藩もある。政治的・軍事的な面では細部にわたって規制していた幕府も教育については別であった。

それにもかかわらず、京都や江戸の私塾での儒教教育は盛んとなる。本論がまず注目するところである。私塾の急速な拡大を基礎にして、各地に藩校もつくられていった。昌平坂学問所にも私塾から教官が迎えられる。私塾の貢献は人材の育成だけでない。その教育活動のなかで新しい思想が創造された。この点にも目をむけたい。

それは幕藩体制の強化のための思想だけでない。体制の改革と打倒の思想も生み出した。君臣関係を基礎づける名分論は改革や革命の理論にも転化したのである。それは、草莽の志士たちの行動をささえる思想となるだろう。儒教教育の歴史を顧みることから、幕藩体制を確固なものし、あるいは倒壊させもした儒教思想の性格をさぐりたい。それは、江戸時代の武士の教養であった儒教教育の意義を問う試みでもある。

1 律令制下の儒学教育——大学寮の成立と衰退

日本での儒教教育の歴史は古い。貴族の子弟にたいする私的な儒教教育はそれ以前にさかのぼれるが、天智・天武天皇の時代にはじまる最初の公的な教育でも儒学教育が中心であった。中国・唐の律令制を導入するとともに、主要教科を儒教教育におく官立の学校・大学寮が式部省のなかに設けられた。⁽¹⁾ 大学寮の目的は官僚養成にあつたが、本科は儒教の古典を専攻する明経科で、付随的な学科として数学教育のための算科があつた。中国・唐の学校・国子監の儒教教育では入学者の身分によつて国子学・太学・四門学と分けられていたなかで、中流貴族の子弟のために設けられた太学が日本に移植されたのである。それが日本に見合うと考えられたのだろう。

教育内容もほぼ中国の太学を踏襲、明経科の教科は『孝経』と『論語』が必修、『礼記』『春秋左氏伝』『毛詩(詩経)』『周礼』『儀礼』『周易(易経)』『尚書(書経)』が選択とされていた。『老子』『春秋公羊伝』『春秋穀梁伝』が欠けているだけである。⁽²⁾ 『孟子』がふくまれていないのをのぞけば、後の儒学教育とほとんどかわらない。⁽³⁾ 学生はまず音博士について経書の読み方(中国音での読み方)を習い、つぎに博士の講義をうける。教育の根幹は儒教を学ぶことにあり、そのために大学寮内には孔子廟が設けられ、春と秋には孔子をまつるせきてん 積奠の儀式が挙行された。

律令国家の官僚は儒教の教養を身につけなければならない。孔子は「之を道みちくに政を以てし、之を齊ととのふるに刑を以てすれば、民免れて恥無し。之を道みちくに徳を以てし、之を齊ととのふるに礼を以てすれば、恥づる有りて且かつ格いたる」(為政)という。儒教が理想としたのは徳治、政治の基本は刑罰でなく、徳と礼であるとしている。これは、律(刑法)と令(行政法)に従う制度とは異質なようにも思われるが、漢代以降の儒教では徳治主義を基本としながらも、法治の必要性をみとめていた。

唐もこの儒教の政治理念と教育制度を受け継いでいたのであり、それが帰化人によって日本にも輸入された。じじつ、初期の大学寮の教官は全員が帰化人、学生もほとんどが帰化人の子弟と見られており、八世紀になっても教官の四割は帰化人であったという。⁽⁴⁾日本との交流が密であった百済が六六〇年に新羅によって滅ぼされると、百済の支配層の人間が日本に亡命、その亡命百済人によって律令制度が日本に導入され大学寮が設立されたと考えられる。その後、帰化人の土着がすすみ、同時に日本人貴族へも拡大していった。

日本の律令制度も公的な教育と一体であった。都には式部省の大学寮のほかにも天文・暦法を所掌する中務省の陰陽寮や医術を担当していた宮内省の典藥寮があつて、そこでは実務とともに後進の養成のための教育がおこなわれていた。中央の大学寮にたいして、諸国の国司の管轄下には国学の設置が定められた。地方官僚の養成が目的、大学寮と典藥寮の機能を兼ねた学校である。学生は郡司の子弟から採用され、修了者は大学寮への進学が可能であつた。国学も儒教教育を中心としており、その施設内にも孔子をまつる聖廟が設けられた。

その後、八世紀になると大学寮では官僚の任務に必要な律令の知識や文章力が求められるようになり、平安時代の初期には、明経道、明法道、文章道、算道の四道制が確立する。文章道は唐の学制にはない日本独特の制度であり、そこには歴史学が加えられ、紀伝道となる。明法道の教科書は『律』『令』、紀伝道では『文選』『爾雅』『史記』『漢書』『後漢書』がつかわれた。日本の律令制にふさわしい教育内容に整備されながら、上流貴族の子弟には蔭位の制で自動的に官職が果たえられるためもあつて、平安時代初期をピークに大学寮は衰退期にはいる。それにともなつて、明法道の地位は低下し、人気は紀伝道にうつる。大学寮の本科であつた明経道も低調であつた。古代の日本人も文学好きで、哲学には馴染まない。文学では多彩な花を咲かせたのに反して、儒教については、そこから独自の思想を育てることはできず、經典の字句の解釈である訓詁の域のとどまつた。貴族の思想的な関心は儒教よりも仏教にむけられていく。

しかも、大学寮の教官の世襲化が進行する。儒教教育は明経道の中原家と清原家の独占となる。儒教の教育にあたる明経道の教官には明経道の家から出たものが任用された。一一七七年に大学寮が焼失すると、以後再建されることはなかった。大陸との交流が途絶えたのも一因であろうが、大学寮も儒教も日本の社会に定着しなかった。それでも、儒教教育は家学として清原家に引き継がれた。私塾化することで辛うじて生き残ったのである。

国学は設置の段階から教官の選任をはじめとして数々の困難をともなったが、一〇世紀前半にはほとんど消滅した。

2 朱子学の移植—京都と江戸の私塾

日本で儒教教育が衰微・消滅しようとしているころ、宋代の中国では儒教界には新しい動きが起こっていた。道教や仏教に対抗し、また、その影響をうけながら理論的に体系化された儒教が模索されていた。北宋時代には、周濂溪の万物生成論、張横渠の気の哲学、程明道の陰陽の気の理論、程伊川の理気の哲学があり、それらの研究を基礎に南宋の朱子は宇宙と人間を統一的にとらえる理気二元論の哲学を構築した。

朱子の新儒教Ⅱ朱子学では、儒教でも重視されてきた超越的な「天」をあらゆる事物に内在する「理」ととらえ、この「理」を原理として宇宙も人間も「気」の凝集によって生起し、現象すると見る。宇宙については、後漢代に生まれた渾天説を採用した。水に浮く方形の大地のまわりを天球が回転するが、天と地は伝統的に上下の関係にあるとみていた。人間についての関心は道徳、その基本は宇宙の原理の理と同一視された人間の「性」にあった。「性即理」である。この「性」の議論では性善説の『孟子』を高く買い、『大学』『論語』『中庸』とともに、儒教枢要の書である四書には『孟子』が含まれることになった。『中庸』では天と性の関連が論ぜられ、『大学』では教育の意義が説かれる。

朱子によれば、性はなににも妨げられていない「本然の性」と欲望の氣に妨げられる「氣質の性」に分けられるが、「氣質の性」を排除して「本然の性」をとりもどすことが、修養の目的とされた。「学は以て聖人に至る道なり」(『近思録』巻二)、だれでも学問の修養で理想的人間である聖人になることができる。朱子学はこの点で平等主義であった。また、「本然の性」においては、君臣の義、父子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の信という社会関係(五倫)が実現される。その点では差別をみとめる。

儒教がそうであったように、朱子学でも修養が最終の目的でない。それによって正しい政治の実現につとめねばならない。『大学』が説くように「修己治人」、政治的にも理想主義の思想であった。朱子は修養を、「居敬」と「窮理」に分けた。内省的な修業である「居敬」は「存心持敬」とよばれる方法で、敬^{つよ}をもって徳を涵養し「本然の性」を獲得することである。外的な物事の理を窮める「窮理」は「格物致知」とよばれるもので、学問によって「本然の性」に到達しようとする。朱子学では比重は後者におかれた。

当時の中国の禅僧たちは、たてまえば「不立文字」でありながら教養として朱子学を学んでいた。禅宗といえども現世に無関心ではなかった。明・清代の中国では朱子学が官学、科擧の基準学説が朱子学であり、国子監の教官も朱子学者が占めていたからでもある。そのようなことで、中国と交流のあった京都・鎌倉五山の僧侶たちによって、中国の最新の思想が日本に移植された。

徳川幕府が成立しても、幕臣のために大学寮を復活させたり、あらたに中国・明の教育制度を導入しようとはしなかった。現実に幕府成立後の儒教教育をリードしたのは、京都五山のひとつ相国寺の僧であった藤原惺窩とその弟子たち、いわゆる京学派の私塾での朱子学教育であった。基本的なテキストは朱子の注釈による四書・五経である。惺窩の弟子には、藩の儒官となった那波活所(紀州藩)、堀杏庵(尾張藩)、三宅寄斎(備前藩)らとともに、多数の弟子を育てた松永尺五(二五

九二一―一六五七）や林羅山（二五八三―一六五七）がいる。清原家が指導的な役割を演ずることはなかったが、近世の儒教教育の嚆矢の地もかつての儒学教育の地である京都であった。

惺窩の親戚で俳人松永貞徳の子である松永尺五は加賀藩に招かれたが、京都にもどり、一六二八年には、西洞院二条に天皇と所司代の援助をうけて私塾・春秋館を開き、皇族、公家、武士に朱子学を教えていた。⁽⁵⁾一六三七年には堀川に講習堂、晩年の一六四八年には御所堺町に尺五堂を建てている。門弟は五〇〇〇人といわれた。そのなかには、野間三竹・安東省庵・宇都宮遯庵・木下順庵・貝原益軒らがいた。

尺五の私塾は本格的な私塾の先駆けである。このような京都の私塾の誕生には京都に清原家などの家学が残っていたのも無視できないが、私塾の性格からいっても、武士や庶民にも解放されていた寺院の世俗教育をうけついでとみるべきであろう。鎌倉時代以降、五山だけでなく、寺院の僧侶のもとでは武士や庶民が仏教の經典だけでなく広く漢学が学ばれていた。そこにおいては、仏教の平等観が階級的な差別のない教育を実現させていたことに注目されるべきである。のちに初等教育のための寺子屋と中・高等教育のために私塾とに分けて考えられるが、もともと峻別できるものでない。

天下をとる前から藤原惺窩の講義をうけていた家康は、開幕の後には惺窩の門下生であった林羅山を侍講に迎えた。朱子学の教育に積極的には取り組まなくても、朱子学者を身近におく。それが家康の姿勢であった。しかし、家光の時代の一六三〇年、羅山は幕府から上野寛永寺近くの土地と資金の提供を受け、書院・塾舎・書庫を建設して、幕臣と諸藩の藩士のための教育をはじめた。翌々年には名古屋藩主徳川義直から孔子像と四賢像（顔子・曾子・子思・孟子）が寄進され、それによって長く途絶えていた釈奠が林家によって復活する。

羅山の私塾は幕府の助成で設立されが、幕府の官吏の養成を目的とするものではなかった。あくまで朱子学を教授する私塾であった。経学の教科書には主に朱子の注釈した四書・五経のテキストが使われ、素読・講釈・会読といった学習形

態がとられた。教育の中心は経学にあつたが、史学、詩文、和学も教えられた。幕臣にかぎらず、諸藩の武士も入門しているが、幕府との密な関係は京都の私塾とは異質な性格を付与することになる。

家康以後四代の將軍に近侍した幕府の儒官として、羅山から発せられる哲学意見にもその立場を強く反映していた。朱子学における核心的な觀念の「理」についていえば、名分論とむすびつけた「上下定分の理」を強調、「天は高く、地は低くし。上下差別あるごとく、人も又君はたつとく、臣はいやしきぞ」(『春鑑抄』)といった言が聞かれる。むろん、羅山の独自の見方ではない。『論語』には、「君は君たり、臣は臣たり、父は父たり、子は子たり」(顔淵)とあり、朱子も、「君臣の間柄は君は尊く、臣は卑しく、その分際は甚だ厳しいものがある」(『朱子語類』卷二二)とのべていた。人間の秩序という人事を天地という自然との関連で理解しようとしていたのである。

逆に、「上下定分の理」は宇宙論の原理ともなる。イエズス会の日本人修道士不于斎ハビアンとの地球説をめぐる論争では、「上下定分の理」から地球の球体説を否定して朱子学の主張する渾天説を擁護する。「万物みるにみな上下あり、彼言のごときは上下なしという、これ理を知らざるなり」(『排耶蘇』)という。幕府に仕える儒者としての任務を自覚していた人間の主張である。

林羅山の幕府内での役割は四代の將軍に侍講として仕えたのに加えて、江戸時代をつうじて幕府教学を支配することになる朱子学の塾の設立にあつた。一代で終わるふつうの塾とは異なつて、子の鷲峯に引き継がれ、その後も幕府との関係を維持しながら子孫に世襲されていった。林家塾をよばれるゆえんである。

開塾から鷲峯が没した一六八〇(延宝八)年までの五一年間に入門した塾生の数は『升堂記』によると三二〇名、このうち身分の確かめられているものは旗本・御家人が五名、諸藩の藩士が八三名。幕府の保護を受けていたが、幕臣以外にも開かれていた塾であつた。しかし、一般の武士にたいする教養教育の塾というよりも、儒者の養成をめざした塾であつた。

この八三名のうち、二〇名が一三の藩の藩儒となっている。『升堂記』以外の文献も合わせると、林家塾出身の儒官は二一藩、四二名となる。林家塾で学んだ朱子学者が全国に広まってゆく。⁶⁾

松永尺五の門人のひとり木下順庵（一六二二—一九八）はじめは京都で塾を開くが、一六八二年に幕府の儒官となり、將軍綱吉の侍講となると江戸に塾を移して、榊原篁洲・新井白石・室鳩巢・雨森芳洲らを育てた。

3 私塾の官学化

林家塾は幕府教学を支配してゆくのだが、それは林家の塾が幕府権力に包含される歴史でもあった。五代將軍の徳川綱吉は林家塾三代目の塾主・林鳳岡の講義を聴き、みずからも講義をおこなうほどの好学の士で、一六九一（元禄四）年には、湯島に土地を提供、孔子像を安置する壮麗な大成殿（聖堂）を新築、林家塾もそこに移転させた。これを機に、林鳳岡は幕臣に編入され、大学頭（律令制の大学寮の最高官職）に任じられた。林家の私事であった積奠も幕府の公事となる。林家塾は幕府の行政に組み込まれてゆく。

教育体制・内容に幕府の意向が反映するようになるのは、八代將軍吉宗のときである。新築した仰高門に付随する東舎（講舎とよばれるようになる）では士庶を問わずだれもが聴ける講釈を連日開催、講堂では旗本・御家人を対象にして定期的な「御座敷講釈」を設けた。そのために、教官を林家出身者以外からも採用した。幕府の学校へ一歩近づいた。

それをさらに前進させたのが、吉宗の孫にあたる老中・松平定信であった。一七九〇年に異学の禁を公布して、低調であった朱子学の地位を挽回させようとするとともに、林家塾の官学化をすすめた。一七九七年には林家塾は改編され、名実ともに幕府直轄の昌平坂学問所となる。ただし、大学頭は林家の世襲がつづく。平安時代には儒教教育の拠点であった

大学寮が衰退、一種の私塾といえる家学に変容したのとは逆に、江戸時代には儒教教育を担っていた私塾をもとに官学が成立した。

この林家塾をはじめ、松永尺五や木下順庵の塾に代表されるように、京都や江戸には儒教の塾が開設され、それは地方の城下にも拡大した。とくに、京都や江戸の私塾には全国から塾生が集まった。こうして江戸時代初期には私塾での儒教教育に支えられて、武士も儒教の古典を学びつつ修養につとめねばならないという文武兼備の武士像が成立、私塾で育った儒者が藩主のブレーンやアドバイザーとしても招かれるようになる。会津の保科正之、岡山の池田光政、水戸の徳川光圀など好学の大名もあらわれる。保科正之は山崎闇斎を、池田光政は熊沢蕃山を、徳川光圀は明の朱舜水をはじめ多数の儒者を召し抱えた。藩主のブレーンやアドバイザーの役だけでなく、儒者は藩士の教育にもあたるようになって、藩校が設立される。池田光政は花畠教場（のち岡山学校）を、保科正之も日新館を創設した。光圀にも藩校の計画があったが、『大日本史』の編纂のために設立した彰考館で家中の教育をおこなっていた。

その後も、藩校の設立がつづくが、その際、城下に設立されていた私塾が藩校の母体となった場合が少なくない。会津の日新館ももとは私塾であった。長州の明倫館、米沢の興讓館などの藩校も私塾が母体となった。名古屋藩の藩校・明倫堂も初代藩主徳川義直や八代藩主宗勝の主導とはいっても藩によって保護されていた私塾から藩校に発展したものである。⁽⁷⁾

一八世紀の前半までに名古屋、岡山、会津、佐賀、和歌山、萩、仙台、米沢などに藩校がつくられ、一八世紀の後半にはいると熊本藩主の細川重賢が一七五五（宝暦五）年に時習館を設立したのをはじめ、高知、鹿児島、秋田、徳島、金沢にも藩校が生まれる。宝暦から安永期（一七五一―一八〇〇）には二五校であったが、天明から享和期（一七八一―一八〇三）になると五九校に増加する。さらに、松平定信の文武奨励は林家塾の官学化をもたらすとともに、藩校開設を刺激する。文化から天保期（一八〇四―四三）にかけて七二校の藩校が誕生した。設立の遅れていた水戸藩でも藩主の徳川斉昭が会沢正志齋や藤

田東湖ら水戸学者を動員して教育目標『弘道館記』とともに、弘道館を創立する。このころまでに主要な藩のほとんどをふくむ全国の藩の半数には藩校が生まれる。平安時代には地方に設立された国学は大学寮よりも先に消滅したのだが、江戸時代には各藩で藩校の設立が積極的になる。ここでは、自生的な私塾の拡大が、藩校という官学的な教育を先導していた。

教育内容は一様でないが、文武両道が基本、文については四書・五経の教育が中心であった。武士には儒教が基礎教養と考えられていた。多くの場合、入学が許されたのは、上・中級の武士であった（大学寮の五位以上に似ている）。学習期間も一定していないが、七、八歳で入塾、遅くとも二〇歳には修了している。素読にはじまり、講釈をうけ、会読や輪講に出席した。武術は剣・槍・弓・馬・柔術が教えられた。

一八世紀末からは私塾も増加、幕末には私塾の設立ラッシュとなる。『日本教育史資料』によると江戸時代に設立された私塾は一〇七六校、一八三〇年以降だけでも七九六校を数える。調査漏れの私塾も少なくなく、実数はこの数字をずっと上回ると考えられている。はるかに多い数の寺子屋も開かれていた。私塾の一〇倍は存在していたとみられる。⁸⁾ 儒教を中心とする漢学ではじまった私塾も多様化し、国学、洋学（主に医学）、漢方医、砲術、算術のほか、剣、槍などの武道の塾や三味線や琴などの芸道の塾もあった。

私塾のほとんどは一代かぎり、継続期間もまちまちであって、平均すると一〇年程度である。どこからでも、どんな身分の人間でも入学できる。そこでは学歴といったものとは無縁、修了とか卒業とかといったお墨付きの考えはない。学問をすることがすべて、そこに教育と思想の活力の源泉があった。

4 私塾の拡大と朱子学の日本的変容——体制維持のイデオロギー

科学技術文明とはちがって、思想や宗教が移植されたままの形で新しい土地で生育するのは難しい。一種の日本化の過程が必要であった。鎌倉仏教も日本の土壤に適した仏教に生まれかえることで、貴族占有の仏教を民衆層にまで拡大できたのであるが、おなじような歴史が江戸時代初期の儒教にも見られた。朱子学が日本に移植されると一部の朱子学の徒からは、日本の風土と日本人の精神に合った儒学を求めようとする動きがあらわれる。

中国では外的事物の「窮理」を重視する朱子学に対抗して、明代の中国では、心の内面から出発しようとする陽明学が支持を集めたが、日本でも近江の小川村で朱子学の私塾を開き、身分を問わない教育をおこなっていた中江藤樹が陽明学に転向、熊沢蕃山や淵岡山を育て、時代はくだるが大塩平八郎にも影響をあたえた。しかし、日本独自の儒教の創造的な展開をもたらした動きのひとつが儒教の原点に回帰しようとする古学派の登場であり、もうひとつは山崎闇斎や水戸学にみられる尊王論と融合させようとする思想運動であった。いずれも私塾教育のなかで生まれた思想であり、その基本は幕藩体制の強化を狙ったものであった。

古学派の儒学者は、形而上学的・宇宙論的な朱子学を排斥し、孔子の経験主義的な儒学へ戻ろうとした。鎌倉仏教が理論重視の旧仏教から離脱して人間の苦の救済のために内面の深まりをめざした実践的な仏教を模索したようにである。その最初の動きは林羅山の私塾の門下生から現われた。兵学者として名をなす山鹿素行（一六二二—一八五）は、「性および天をばみな理と解釈するのは、とくに間違っているのである」（『聖教要録』中）とし朱子学をその根底から退け、『四書句読大全』では、『大学』を万世聖学の標準、『論語』は聖教的の的所と高く評価する。それに反して、『中庸』『孟子』は買わない。幕

府からは睨まれていたが、『論語』に帰れと説く素行の人氣は高く、江戸市中の門弟二〇〇〇人を数えたという。

そのころ、京都では『論語』を「実に宇宙第一の書なり」(『大学非孔書弁』)と唱えていた町人学者の伊藤仁斎(一六二七—一七〇五)がいた。三〇代には、堀川の自宅に朱子学の塾である古義堂を開塾、同時に同好の人々と語らって研究会「同志会」も開催している。宇宙と人間を一体とみる朱子の理氣二元論に疑問を抱いた仁斎は、もともと大切なのは人間の経験、孔子や孟子の意図を追体験的に把握せねばならないとして、氣に先立つ理が存在などは認められないと主張する。『孟子』を『論語』の羽翼とするが、『大学』『中庸』は偽作とした。古義堂の塾生には諸藩の藩士もいたが、多くは医師や商人であった。出身地も東北から鹿児島まで全国各地におよぶ。門下生三〇〇〇人といわれた。

古学派のなかで影響力のもっとも大きかったのが、仁斎の学風に刺激されて朱子学から古学に転じた荻生徂徠(一六六六—一七二八)である。芝の増上寺近くに開いた私塾で朱子学を教えていた徂徠は三二歳のとき五代將軍徳川綱吉の寵臣・柳沢吉保につかえたのち、四四歳からは江戸の茅場町で会読形式の教育を重視した護園塾を主宰、孔子以前に回歸すべきであると、孔子が理想とした「先王の道」にもとづくべきであるとした。つまり、『弁道』でのべるように、「唐虞三代」の聖人の定めた社会制度である「礼楽刑政」を学び、現実の政治的課題である「経世済民」につとめねばならない。

仁斎が『孟子』を介して儒教をみようとしたのにたいして、徂徠は『荀子』、あるいは法家を通して儒教をとらえようとする。それゆえ、「先王の道」を、「天」や「理」といった朱子学の形而上学的な原理とむすびつけることはない。君臣関係という制度の問題を天地の上下関係とむすびつける「上下定分の理」などは問題にされない。「夫れ、道は先王の立つ所、天地自然の之有るあらず」(『弁名』学九則)である。

それは徂徠の教育観も規定した。人間がいくら学んでも聖人の域に達することなどありえない。氣質の性を変えて本然の性に復える(聖人になる)ことの可能性を認めなかった。聖人は生まれつきのものである。「先王の聡明叡知の徳は、これ

を天性に稟く。凡人の能く及ぶところに非ず。故に古者は学んで聖人となるの説なきなり」(『弁道』五)。だれもが学問にとめることで聖人になれるなどというのは大間違い。儒教にあった平等主義・理想主義は捨てられる。したがって、そこには社会の改革の契機は認めがたい。

教育を否定するのではない。学ぶべきものは「礼楽刑政」、そのためには聖人の残した経書を読み、それを現在の「経世済民」に生かす。それによって、「聖人」といった画一的な理想を追うのではない。徂徠は「人ごとにその性(天性)を殊にし、性ごとに徳も殊にす。財(才能)を達し器(器量)を成すは、得て一にすべからず」(『学則』七)という。天からさずかった性も徳も人間ごとに違うのであるから画一的な教育はのぞましくない。教育の役割は個々の人間の個性を延ばすこと、しかし、自由に個性を伸ばせばよいのではなく、その地位に応じた社会の一構成員として役割を担えるような方向に育てることが大切であるとする。そうして、現実の幕藩体制に随従、そこで役立つ教育をめざさねばならない。徂徠も天命については、『中庸』にしたがって、性は天からさずかったとする。しかし、徂徠の天命は運命的な天命であって、革命を可とする天命ではない。そのあたえられた職分に生きることが天命、天職であった。

このような経世学的な思想と能力を買われた徂徠は五代將軍徳川綱吉の寵臣・柳沢吉保につかえ、また、八代將軍吉宗からの信頼もあつく、意見を求められた。門人たちも藩政の改革にあたろうとしていた藩に迎えられた。古学一般の儒者にも仕官の道が開けたのだが、とくに徂徠派の人氣は高く、テクノクラートとして有能さを評価されて、一八世紀には朱子学をしのぐ。正徳から文政期(一七一一—一八〇一)までに諸藩に仕えた儒者六〇六名のうち学派の明らかな儒者の数を見ると、林家塾をふくむ京学派の六三名にたいして、徂徠学派は九一名であった⁽⁹⁾。主要な学派をあげると、朱子学では闇齋学派が四七名、古学派では仁齋学派が四二名。ただし、定信による異学の禁以後は京学派が増加、古学派が減少する。

儒教を実用の学とみる日本化によって幕藩体制のなかで、その強化のために貢献した古学派にたいして、朱子学を尊王

論と結合させ、幕藩体制をイデオロギー的に強化しようとする動きもあつた。文字通りの日本化である復古思想である。その最初の動きは、堀川をはさんで仁斎の古義堂の向かいで私塾・敬義塾を営んでいた山崎闇齋（二六一八―八二二）にはじまる。

土佐で南学派の朱子学を修めた山崎闇齋は、京学派の朱子学に批判の鋒をむけ、藤原惺窩は容陽明学的であるとして、林羅山の陽明学排撃の態度にもあきたらないとして、純粋な朱子学を追求するとした。そうであるが、「窮理」よりも「居敬」による直覚を強調、嚴格主義・訓練主義・修養主義に特色のあつた朱子学者であつた。窮理軽視は古学にも共通する日本の変容といつてよい。それでいて、朱子学に関係のない書物を読ませず、詩文に耽るのを禁じた。多くの私塾が個人指導と会読（ゼミ）であつたのにたいして、闇齋に塾では講釈（講義）の方式がとられた。そのなかから浅見綱齋、佐藤直方、三宅尚齋らが育つ。一六六五年四八歳のときに、四代将軍家綱の後見役となつた会津藩主保科正之に招かれたことで名声があがる。

その朱子学に殉ずるとした闇齋は京都で門弟の教育に専念しながら、本地垂迹説に批判的な卜部神道（吉田神道）を学び、神儒一致を説く垂加神道を唱える。それによつて、朱子学の名分論を尊王論とむすびつけるとともに、唐の韓退之の『拘幽操』をとりあげて君臣上下の大義を明らかにして、君主への絶対的な恭順を説く。日本では、天皇は万世一系、悠久であるならば、幕藩体制の君臣関係も永遠であらねばならない。尊王敬幕論である。

林羅山をはじめ、荻生徂徠も君臣関係を将軍以下の武士社会に限定したのにたいして、闇齋は天皇包摂しようとしたが、それをより明確にした尊王敬幕論を主張したのが水戸学であつた。

水戸学も朱子学に出発した。初代藩主徳川頼房のとき、惺窩門下の菅玄用の弟子の人見卜幽、岡部拙斎、羅山の門人の辻端亨らを儒官に登用している。『大日本史』の編纂にとりくんだ二代藩主の光圀のときには、闇齋学派の三宅観瀾、栗山

潜峯、鵜飼練齋らが加わった。そのため、朱子学的な名分論のもとに、皇統の正閏を明らかにし、君臣の関係を正すことをめざした『大日本史』は閨齋学派の影響も受けたとみられている。⁽¹⁰⁾ 歴史を名分論の観点で解釈し、名分論を歴史から確認しようとする仕事は、その後、立原翠軒とその門人の藤田幽谷ら水戸で育った水戸学者たちに継承された。

しかも、一揆の頻発と藩の沿岸に襲来する外国船にたいする危機感から名分論を現実の政治の観点からとらえるようになる。『大日本史』の編纂にかかわっていた藤田幽谷は松平定信に提出した『正名論』で「天地ありて、然る後に君臣あり。君臣ありて、然る後に上下あり」と、朱子学的な名分論を説きながら、それを天皇を頂点とする君臣関係と理解、さらに、「幕府、皇室を尊べば、すなわち諸侯、幕府を崇び、諸侯、幕府を崇べば、すなわち卿・太夫、諸侯を敬す」と天皇・將軍・大名・藩士という序列的な尊崇を回復することで弛緩しつつあった幕藩体制を強化しようとした。幽谷は私塾・青藍舎を経営したが、最初期の門弟であった会沢正志齋は『新論』を書いて、尊王論を朱子学から基礎づけ、頻々と襲来する外国勢力を排斥しようとする攘夷論とむすびつけた。同時に、朱子学は天を理として自然と人間の全宇宙に内在化させた⁽¹¹⁾が、会沢は天をアマテラスと同一視し、天皇に内在化させた。それによって天皇の位置は絶対的となる。会沢正志齋も幽谷の子息の藤田東湖も私塾を営み、水戸学の思想を教育する。それだけでない、『新論』など水戸学の著作をとおして水戸学は全国の志士たちに強い影響をおよぼした。

5 江戸時代の儒教——改革のイデオロギー

儒教は体制の維持のイデオロギーであり、儒教の精神を日本により適応させようとした閨齋学でも水戸学でもそれは変わりがない。「君は君たり、臣は臣たり、父は父たり、子は子たり」(顔淵)という名分論が実現されていなければならない。

